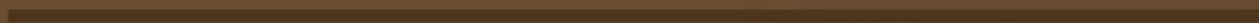




存在



はじまりの挨拶

君が何と思おうがそれは自由だ。

この物語は僕の足跡であり、君のそれとは異なる。

故にこの物語に意味など無いのかもしれない。

そうだね・・・

敢えてこの物語に意味があるとするならば、

僕は知ってほしただけなんだ。

彼らのことを。

少女

僕が出会った少女の話をしよう。

彼女は花を育てることが好きだった。

小さな庭には花壇が敷き詰められ、その全てに彼女は愛を注いだ。
それは彼女の生きがいであり、全てといっても過言ではなかった。

ある日、彼女の弟が重たい病気にかかった。
不治の病だった。余命も残りわずかの状態だった。

彼女は幼い弟を救いたかった。
でも無力な彼女に出来ることはなかった。

だから彼女は弟と約束した
『君の好きな花を育てるよ。待っててね、すぐに見せてあげるから』

彼女は弟の為に花を育てた。
小さな庭の片隅で彼の大好きな花を咲かせようとした。
それは彼女の希望であり、家族の希望になった。

ここで僕の意見を述べさせて頂こう。
創られた物語は幻想に溢れ、奇跡は必ず起きるものだと。
誰もがそう信じて願わざるを得ない。
それさえもまるで予定調和となっではないだろうか？

詰まるところ、何が言いたいかというと

彼女の花は咲かなかった。
家族の願いを託した花は咲くことはなかった。

小さな庭には花壇が敷き詰められ、その全てに彼女は愛を注いだ。
でも希望を託した花だけは咲くことはなかった。

ドラマや物語で例えるなら
彼女の物語である以上、少女は唯一無二の主人公と言えるだろう。

しかしながら奇跡など起きなかった。

物語の主人公である彼女にさえ、奇跡が起きることはなかった。

さて、

君たちはこの話を聞いてどう思うだろうか？

少女の事を可愛そうだと同情するだろうか？

その過程のみを評価し、頑張ったねと賞賛するだろうか？

諦めることさえも許さずに、何度でも頑張れと励ますだろうか？

それとも・・・ 奇跡を起こさなかった運命を憎むだろうか？

『自由』とうい概念はすこぶる人を傷付ける。

語り方も捉え方も千差万別だからね。

他人の気持ちを代弁する事は自由であり、残酷だ

自分の物差しで他人を押し量るのは自由であり、残酷だ

努力している人間に対してがんばれと声をかけるのは自由であり、残酷だ

この物語の終幕を始めよう

彼女の花は咲かなかった。

家族の願いを託した花は咲くことはなかった。

だから彼女は願いを託した花を代用した。

その全てを自分が育てたと偽り、弟に見せた。

弟は喜び、少女も笑顔だった。

少女はその過程に起きた不幸も挫折も喪失も

全てを飲み込んで幸せな結末を求めた。

たった一つの嘘で、奇跡がおこらなかった結末を亡きものにした。

たった一つの嘘で、彼女に語られる言葉を亡きものにした。

たった一つの嘘で、家族が笑顔になれた。

そうだね。これは考えられる限り最高の結末だと思う。

素晴らしい話だと思わないだろうか？

事実どうであれ、彼女は偽りの奇跡を起こしたんだ。

だって、奇跡なんてものは幸せな結末にしか訪れないのだから。

少女は僕に言ったよ。

『家族が笑えるならば、私はそれで良かった。
この一瞬だけを望んでいたのだから
だから私は覚悟したんだ・・・
紛い物の罪を背負う事も、その罪の在り方も』

少女は頭の良い子だ。
僕が何を言いたいのかを分かってたんだろうね。

僕かい？

僕はもちろん分かっているさ。

この話は聞き手にさえもその罪を背負わせてしまうって事を

それは幸せになればなるほど重くなる罪

さて、
もう一度、問いかけさせて頂こう
君たちはこの話を聞いてどう思うだろうか？

道化師

僕が出会った道化師の話をしよう

彼は生まれつき目が見えなかった。
故に彼は聴覚が人よりも優れていた。

彼は人の笑い声が好きだった。
それは幸せの象徴であり、彼の夢となった。

いつしか彼はこう望んだ。
『僕は常に笑顔でいよう。そうすれば周りの皆も喜んでくれる』

彼は常に笑顔でいるようになった。
結果、彼の周りには笑顔が溢れた。
いくつもの笑い声が聞こえた。
いろんな人の笑い声が聞こえた。

言葉だけでは不器用で、とても全てを表現できない
だから僕たちは気付かなければいけない。
笑い声なんてものは必ずしも幸せと同じ方向を向いていないことを

彼は嘲笑れていたんだ。
口を横に大きく開け、頬は固まっているかの様に引きつっていた
その姿はまさに道化師 綱渡りも出来ず一輪車にも乗れない見掛けだけの道化師
その姿は卑下され、罵られた。

それでも彼は今日も笑顔をつくる

さて、君達はこの話を聞いてどう思うだろうか？

彼を可哀想だと涙するだろうか？
彼を嘲笑した人間を酷く軽蔑するだろうか？

まるで言葉遊びの様な話だ

声に出せばそれは同じ言葉
文字で表せばそれは相容れない言葉

では、この物語の終幕をはじめよう

彼は人の笑い声が好きだった
だから彼はいつも自分は笑顔でいようと誓った。

その結果、自分が嘲笑れている事を彼は知っていた

彼の耳にはいつも嘲笑が聞こえるようになった。
それでも彼は選んだ。自分に出来る最良の選択を

『最良の選択とはなんだい？』

自分にとって都合のいい選択？
他人にとって都合のいい選択？

では彼が答えた選択はどうだろう？

『人が笑ってくれれば良かった。
人を笑顔にする事が出来たんだ。
それが例え、100点満点の結果ではなかったとしてもいいじゃないか』

ああ なんだ・・・

これ以上無い最良の選択じゃないか

彼の願いは叶った。
その形は歪に歪んでいるとしても

彼が望んだのは人々の笑顔であり、笑い声だった。
その結末は曇ってはいるけれども叶ったと言えるだろう。

では彼は幸せなのだろうか？

願いが叶ったんだ。

答えはひとつしかないね。

彼は今日も笑っている。

彼の周りには笑顔が溢れている。

さて、君達はこの話を聞いてどう思うだろうか？

恋人

僕の恋人だった人の話をしよう

彼女は気高い人だった

あまりにもその生き方は真っ直ぐで迷いがなく、
拍手も喝采も、その全てを受け止める事の出来る誇り高き人だった。

安穩と日々を消化する僕にとって、その背中は何れだけ眩しく見えただろう

その強さに憧れ、その道を歩みたいと願う事が出来た。

あの時彼女に出会わなければ、僕は今でも道を見失っていただろう

彼女を守ろうと僕は頑張った

でも彼女はそれを拒んだ。

僕だけが頑張る事を許してくれなかった

二人は二人で歩ける分だけ前へ進むようになった。

その歩みの中でいろんな人に出会う事が出来た。

その中で、彼女は多くの人を救った。

感謝も喝采も、全て受け止めて二人で歩いた。

いつからだろう、彼女の誇りが眩しくて、そうありたいと願うようになったのは

いつからだろう、彼女の優しさが羨ましくて、そうありたいと願うようになったのは

まるで子供向けの絵本のように幸せな結末を見せつけられた。

そこには虚言も戯言もなく、純粹に幸せに満ち溢れた世界があった。

僕は世界の在り方をこう思う。

出発の朝はいつもどしゃ降りの雨だ。

その雨を浴びて、綺麗になる人

その雨を拒み、傘をさして守る人

その雨を貯めて、生きる糧にする人

いろんな人がいろんな形で旅に出るんだ

こんな取留めの無い事を呟いた時、彼女はこう言った。

『晴れの日を出発の日にすれば良い。

悲しい事や辛い事を経験すれば人は強くなれるという幻想が私は嫌いだ。

それは悲しい事や辛い事を経験した事が無い人が吐いた妄言。

始まりから終わりまで幸せなら、それに勝る幸せなんてないよ』

ああなるほど・・・

知らない事は罪だ。でもその罪すらも分からなければ、そこには幸せしか残らない

声が出ない、息が出来ない、目眩がした。

彼女は幸せにしたいと思う人を助けた。

彼女は幸せに出来る人だけを助けた。

その姿勢に一片の曇りもなく、間違いもなかった。

彼女の歩みには日溜まりしかなかった。

僕は幸せにならなければいけないと思う人を助けた。

僕には不幸を背負った人が目に付いた。

その姿勢は決して間違いではなかったと言える。

ただ、僕と彼女は似ているようで、本質がまるで正反対

この物語の終幕をはじめよう

彼女は気高い人だった

あまりにもその生き方は真っ直ぐで迷いがなく、

彼女は日溜まりだけを歩み続けた。

たくさんの幸せのために、一人を犠牲にする事になろうとも。

ただ一度だけ、その一人を助ける事になってしまった。

そして、その一人が僕だただけの話だ。

その結果を彼女がどう受け止めたのかを僕は今でも知らない。

過去は精算できない。忘れる事もやり直す事も出来ない。

だがそれでも望んでしまう事がある。

あの時彼女に出会わなければ、僕は今でも道を見失っていただろう

あの時僕に出会わなければ、彼女はただ一度の失敗を犯す事も無かっただろう。

だから・・・

あの時差し出された手を、繋いだまま歩み続けた日々を
これで終わりにしよう。

それが彼女の望む幸せの形とは違うとしても、
それが自己満足の幸せだとしても

それが二人の終着駅。

これはそんな二人の話。

さて、君達は話を聞いてどう思うだろうか？

僕

僕の話をしてしよう。

これは僕の話であって君のそれとは異なる。
だからこの話に意味など無いのかもしれない。

人はそれぞれがそれぞれの思いを抱き道をなす。
唯、そこに覚悟があるかどうかの違いだ。

その意思是磐石だろうか？その全てを君は受け入れられるだろうか？
つまりはその間に答えるモノがあるかどうかだ。

そういう意味ではこの物語の主人公たちには覚悟があった。

少女は一時の幸せのために一生の罪を背負う覚悟があった。
道化師は夢のために、その手段を問わない覚悟があった。
彼女には闇に囚われず、日溜まりだけを歩く覚悟があった。

その姿を君達はどう思うだろうか？

僕は人助けの旅をしている訳ではない。
ただ、旅を続けていれば多かれ少なかれそういう人達に出会う。
この物語はその一端。
その中でたくさんの声が聞こえてきた。

それは誹謗中傷の渦だった。誰ひとりとして彼らを理解せず嘲笑う。

『嘘つき』『可哀想』『偽善』『罪人』『自己満足』・・・

それは彼女と歩いた日溜まりの道とは似ても似つかないもの

個人の否定。幸せの否定。覚悟の否定。

僕はその声に背を向け続けた。
何度も何度も背を向けて旅を続けてきた。

自由というのは残酷だ。

誰かが誰かを否定する事さえ許容してしまう。

この感情をなんと呼べばいいのだろうか

そこには幸せな結末しかなかった筈なのに・・・

この物語を終わりにしよう

この話は僕の話であって、君たちのそれとは異なる。

僕は人助けの旅をしている訳ではない。

ただ、旅を続けていれば多かれ少なかれそういう人達に出会う。

その人達の結末の全てを塗り潰してきた。

少女も

道化師も

恋人も

幸せな結末を迎えたと思い込んで自己を保った。

全ては自己満足、自己愉悦、自己陶醉。

その在り方が、とてもつもなく憎くて、悔しくて、それでも繰り返した。

人はそれぞれがそれぞれの思いを抱き道をなす。

唯、そこに覚悟があるかどうかの違いだ。

唯、覚悟したからには受け入れなければならない結末もある。

その結末を、その覚悟の代償を、僕は捻じ曲げようとした。

罰せられるなら、それは許される事のない罪になるだろう。

でも、誹謗中傷の中、こぼれ落ちるものを見てしまった。

でも、誹謗中傷の中、溢れ出るものが抑えられなかった。

これは正義でも何でもない、ただの我儘だ。

『彼らは幸せでなければならない』とってしまった。
そうならないなら、こんな世界など滅びてしまえば良いとさえ思った。

この物語は僕の罪だ。
自由を盾に、僕は捻じ曲げた解釈で物語を語ってきた。

だから、この物語に意味等ない。
ただ、僕は見たかっただけだ。
彼等が幸せな結末を迎える未来を・・・

アイツの話をしてしよう。

アイツは生まれつき色を判別できなかつたらしい。

それは彼にとって多くの障害をもたらし、他人との違いをまざまざと見せつけられたものだった。

その度に彼は暴力をもって解決する方法を選んだ。

馬鹿にされれば、その口が開かなくなるまで殴り

指をさされれば、その指を叩き折った。

アイツが口にしていた事を思い出す。

『痛みを伴わない行動をする人間には、等しく痛みを与えて教えるべきだ

何も知らないよりは少しはマシになるだろう』

実に彼らしい退廃的な言葉であり、戯言だと思う。

そして私はそんなアイツと出会った。

私はそれまでに多くの人を見てきたが、彼よりも歪な人間は見たことがなかった。

人を傷付けるくせに、人の痛みを誰よりも理解している。

その狭間に居てなお、彼は苦悩すらしめない。

普通の人間なら壊れてしまっているだろう。

アイツは狂っている。

私に彼は救えない。私は自分の救える範囲の人間しか救わないと決めている。

なのに何故、私は彼を旅の共として選んだのだろうか？

単純な話、私は彼にムカついていたんだ。

アイツの見る世界の全てを否定してやりたくなった。

その全てを塗り替えてしまいたかった。

そして、その願いは叶ったと言えるだろう。

アイツは旅の途中で大きく変わっていった。

たくさんの人を助け、たくさんの人に感謝される人になった。

私達は二人で歩ける分だけ、多くの人達を救う事が出来た。

いつからだろうか、二人の歩幅が狂いだしたのは・・・

彼は『私には救えないと判断した人』に手を差し伸べるようになった。
それは傍目に見ても理解できる行動ではなかった。
ただその行動は、驕りでも見栄でも虚勢でもなかった。

だから、別れを告げたのは私の方だ。

彼を断罪した。
その在り方の歪さも、その行動の行く末も全てを否定した。

アイツは笑っていたよ。
アイツは解ってたんだ。

それでも尚、アイツはその道を諦めなかった。
それでも尚、アイツの心は折れることは無かった。

救えるものしか救わない臆病な私と、救われないとわかっていながら救おうとする愚か者の二人。
これはそんな二人の別れ話だ。

アイツの言葉を借りるなら、

この物語の終幕をはじめましょう

アイツは生まれつき色を判別できなかった。
他人との違いを見せ付けられたおかげで、
アイツには痛みを背負った人間を見つけ易かった。

だからアイツは、人を救おうとなんてするべきではなかった。
その先に幸せなんてものは存在しない。
あまりにも多くの痛みが見えすぎた。

ただ・・・

他人の痛みを共に分かち、共に背負い歩き続ける。
全てを肯定し、自分を傷付けてまでも他人の在り方を尊重する。

そんなアイツだから、私達の全てを受け止めて笑ってくれた。

『間違いなんかじゃない』って言ってくれた

その言葉にどれだけの覚悟が必要だったのだろうか
その言葉の重さを知りながら、どれほど彼は苦悩したのだろうか

嘘つきと蔑まれた少女も、道化師と罵られた男も、もちろん私自身も、
どれほどアイツの存在に救われただろうか

その救い方が戯言であれ、罪と呼ばれようとも
アイツだけが私達を認めてくれた。

私達は覚悟をもって挑んだ代償を受けなければいけない。
その真理を捻じ曲げてでも、アイツは手を差し伸べた。

私はアイツの隣にいて幸せだった。
でもアイツは自分の幸せよりも私の幸せを優先する人だった。
でもアイツは自分の幸せよりも他人の幸せを優先する人だった。
アイツは快樂や悦樂は求めても、救いだけは求めなかった。

それが分かった瞬間、私の生き方が決まった。

アイツが最後までその道を歩き続けた時、すぐに抱きしめてやる。
『お疲れ様』って言ってやる。

その為に、あの時、繋いだ手を振り解かなければいけなかった。
これ以上傍にいれば、きっと私もアイツの道を歩んでしまうから。

これは私が歩む道の中で唯一の例外。

私にはアイツを救えないけど、この道だけは日溜まりを歩けなくともこれ以上ないくらい、私はアイツという存在を大切に思う。

例え君達がそうは思わなくとも、

一人くらいはこんな奴がいてもいいじゃないか・・・